

林文子先生を偲んで

林先生とわが家

高田 健三

それは昨年（平成5年）の8月も下旬頃であったと思う。いつものように頼まれていた「健康文化振興財団紀要」の原稿が遅れたことのおわびかたがた、フロッピーを速達で送ったことの連絡をしたとき、電話を通しお話ししたのが、林先生の声聞く最後となった。あの独特のトーンを持った先生の声は、今やその面影とともに私の忘れ得ぬ思い出の一つとなってしまった。

私と先生との出会いは家内を通して始まった。家内の父が、現岐阜大学医学部の前身である岐阜女子医学専門学校で教えている時、林先生は希望に燃える女子学生の一人であったという。家内の家が学校に近かったこともあってか顔を合わせる機会も多く、話に花が咲くこともしばしばであったとか。そういえば先生はなかなかの論客であって、その話し方は妙に説得力があった。病気になると大騒ぎして、なかなか医者の方の云うことを聞かず、人を困らせた家内の母親も、林先生に診てもらおうと神妙に納得することしばしばであった。おそらく、終戦の時期からの長い先生との人間付き合いから生まれた信頼関係のなせる業であろう。我が家にとっては掛け替えのないホームドクターであった。

お世話になったその母も数年前に亡くなった。生けるものには総て寿命があることは生命科学の原理であるとはいえ、林先生の一生は短か過ぎた。先生の総てであった健康文化振興財団の発展の時期を迎えて、更なる計画をお持ちであったに違いない。今や、あの情熱溢れる話しぶりに接するすべもなく、痛惜の思いはいまだ抑えようもない。

林先生、安らかにお眠り下さい。

（同朋大学教授・名古屋大学名誉教授）